

や、有りて黒く焼きこがしたる餅を、反故につくみ杉楊枝を添へて、引かれしとぞ。
〔愈の須佐美追加〕下佐倉少將利勝朝臣大老たりし時、或國君執政たちに請れるは、近日茶をすめたく候、御出下さるべく候やと申されしかば、朝臣を始各一同に、是は興ある事に候、某日皆可參と約束有けり。○中當日に及て、老臣達うちつれて行れければ、主人門内に迎て、辱よしを述書院に招じやがて、數奇屋に入られけるに、小き重箱にかいもちひ五つ入ふたの上に楊枝をそへて出されけり。

楊枝宮

〔江家次第十五〕大管會

卯日○中皇。上召御手水。女藏人傳供、近例頭、藏人奉之、○中略

次十姫十男、以次參入、列居於中戸南。次八姫之中

二人相分、共昇海老鱒槽、置御前短帖。

已上一姫留候

一姫歸取楊枝宮、授留姫、姫取之置槽南邊。

楊枝指

〔嬉遊笑覽二中〕服飾こぎくの五ツ折爪。楊枝を指こみ。○中略

男女ともに楊枝さしと云もの、昔はなくはながみの間に入るまでなり、賤の小手卷に、やうじさし、大かた女の拵へたる切封じの手紙に、またるやうじ指なりしに、次第に色々の工夫して、黄土佐紙にて、小く拵へたる有、又折居にして、疊むやうに、またるもあり、とかくいやみなく、辨理なるかたになりたり、かく云へるは、寛延頃なり、是にて楊枝も小くなりしを知る。

〔嬉遊笑覽二中〕服飾賤小手卷、はな紙袋、昔は一ツ口にして、脇入を入口のかぶせに、銀の大なる平がなものさま、物すきして、打たり、それを紫のふくさに包み、胴じめに、眞田の廣きを廻し、銀の平き輪かなものを、はめ、緒じめの如くしめ、其先に、落し巾著を付て、内懷へ入て持たり、はな紙別に、其儘入るか、又ははながみさし、はな紙押へとて、きれにてうすく拵へ、挟みて入たり、右のはなが